

第55回政策本会議
「東アジア・ビジョン・グループIIを終えて」メモ

2012年12月17日
東アジア共同体評議会事務局

ASEAN+3首脳会議の要請を受けて、東アジア地域統合のあるべき姿について2010年10月以来検討を進めてきた「東アジア・ビジョン・グループII」の最終報告書が、さる11月にカンボジアで開催されたASEAN+3首脳会議に提出されたのを受けて、第55回政策本会議は、「東アジア・ビジョン・グループII」の日本代表である田中明彦当評議会顧問（東京大学教授・国際協力機構理事長）を報告者に迎え、「東アジア・ビジョン・グループIIを終えて」と題して、下記の要領で開催された。

1. 日時：2012年12月17日（月）午後2時より午後4時まで
2. 場所：日本国際フォーラム会議室
3. テーマ：「東アジア・ビジョン・グループIIを終えて」
4. 報告者：田中 明彦 東京大学教授・国際協力機構理事長
5. 出席者：23名
6. 審議概要

(1) 冒頭、田中明彦当評議会顧問から、つぎの通りの基調報告があった。

(イ) EAVG IIの目的、背景など

EAVG IIは、韓国の李明博大統領の提案により2010年のASEAN+3 (APT) 首脳会議において設立された。1999年に金大中大統領の提案で設立されたEAVG Iと同様、韓国のイニシアチブによって設立された。今回、このようにEAVG IIが組織された目的は、APTがその設立から15年、さらにEAVG Iから10年が経過したため、これまでのAPT協力およびその成果の再検討を行い、かつEASなど他の枠組みによる成果との補完性も考慮に入れつつ、今後の地域協力の方向性を提示することにあつた。EAVG IIは、2011年のAPT高級事務レベル会合で「設立運営規則」が定められ、同年夏頃に各国より1名からなる代表者が選定され、2011年10月に韓国・ソウル、2012年2月にベトナム・ナチャン、同年5月に東京、同年9月にインドネシア・バリ、と合計4回の会合を行い、その『最終報告書』をとりまとめた。EAVG IIの運営面におけるEAVG Iとの大きな違いは、各国代表者が2名から1名に縮小されたことである。そのためか、各国代表者は元大使など外交関係出身者がほとんどで、日本以外に有識者が代表者となったのは、中国のZhang Yunling 中国社会科学院教授、韓国のYoon Young-kwan ソウル大学教授、インドネシアのJusuf Wanandi インドネシア CSIS 副代表の計4名のみであった。その他に特記すべきことは、今回は+3側およびASEAN側から共同議長を選出して会合を行うことになり、カンボジア、韓国の代表者がそれを務めたことであつた。

(ロ) 『EAVG II最終報告書』の概要

上記で述べたEAVG IIの全4回の会合のうち、最初の2回では、EAVG Iの『最終報告書』が提出された2001年以降、その提案が今日までどのような成果を出したのかが検討された。その中でまず、EAVG Iで提案された長期的ビジョン「平和、繁栄、進歩の共同体を創設する」については、引き続きこれを追求していくことで、各国代表の意見が一致した。そのためEAVG IIの後半2回の会合では、その長期的ビジョンをさらに追求するための中期的ビジョンを検討することとなった。その結果として最終的に取りまとめられたのが、「2020年までに東アジア経済共同体を実現する (Realising an East Asia Economic Community by 2020)」というビジョンであり、これは『EAVG II最終報告書』の副題として提示されることとなった。なお、同文章における「Community」のCが、小文字ではなく大文字のCとすることで合意されたことは、特記すべきことである。このようにEAVG IIで経済共同体を特に取り上げた理由は、政治・安全保障、文化・社会分野に比べ、経済・金融分野では「チェンマイ・イニシアチブのマルチ化 (CMIM)」、「ASEAN+3マクロ経済・リサーチ・オフィス (AMRO)」、「アジア債券市場イニシアチブ (ABMI)」など著しい成果を上げており、同分野でさらなる統合を推し進める提案をすべきであるとの結論に達したためである。この経済共同体の実現のため、『EAVG II最終報告書』では、(a) 単一市場と経済基盤、(b) 金融の安定、食料・エネルギー安全保障、(c) 公平で持続可能な発展、(d) グローバル経済への積極的な関与、という4つの柱を提示し、またそれらを具体的に推し進める方策として、東アジア地域包括的経済連携 (RCEP) 締結への支援、「東アジア通貨基金」設立への研究、などを提案することとした。このような経済・金融分野以外の提言としては、政治・安全保障面で「グッド・ガバナンス」、「法の支配」、「人権」といった基本的価値の促進、また非伝統的安全保障として「海洋安全保障」について取り上げることができた。

これらは、今後の APT 協力を進める上で、特記すべき成果である。

(ハ) EAVG II の議論の総括

最後に、『EAVG II 最終報告書』の審議の過程で気づいた各国の動向について、気づいた点を数点あげたい。まず、韓国であるが、EAVG II が韓国のイニシアチブで設立されたという背景から、その報告書ドラフトもまず韓国が作成して、各国に提出した。次に ASEAN であるが、今回の『最終報告書』に盛り込む内容として、「貿易のモニタリング」、「東アジア通貨基金」など経済・金融分野における制度化を促進するといった提言があったが、ASEAN 内部では消極的な意見があり、それらは「研究する」といった表現でまとめられることとなった。さらに、上記(ロ)で紹介した『最終報告書』の「2020年までに東アジア経済共同体を実現する (Realising an East Asia Economic Community by 2020)」という副題にも、ASEAN 側からの要求で「国家の主権を制約するものではない」との内容の「注」が付されるという結果となった。また、ASEAN 側は、今回「ASEAN centrality」へのこだわりを顕著に表明していた。韓国側からのドラフトに対して、ASEAN 側からも代替案のドラフトを提出し、また、韓国ドラフトへのコメントを行うにあたって、ASEAN 10ヶ国が1か国ずつ行うのではなく、ASEAN として1つの意見を取りまとめて、それを提出するというやり方であった。さらに『最終報告書』の中に、3回「ASEAN centrality」の文言が言及されることになった。最後に、中国についてであるが、中国は1回目の会合には中国現代国際関係研究院の CUI Liru 院長が代表として参加していたが、2回目は欠席し、3回目から Zhang Yunlin 社会科学院教授に代表を交代させるなど、一定しない関与であった。もっとも3回目の会合から中国代表を務めた Zhang Yunlin 教授は、旧知の人物であり EAVG I の代表でもあり、私としてはやりやすかった。

(ニ) EAVG II と報道

「EAVG II の重要性にもかかわらず、メディアがこれを全く報道していない」との指摘があるが、じつは EAVG I も当初は全く報道されていなかった。その後、EASG が EAVG の報告書をフォローアップし、その具体的な提言のいくつかが実現して行くにつれて、メディアも次第に注目するようになった、という経緯がある。今回もそのようになることを期待している。

(2) その後、出席議員から、つぎのとおりコメントないし質問があった。

- (イ) 韓国からの提案が抽象的な精神論に流れがちで、そのままでは具体的な提案につながらなかったということだが、韓国は EAVG I のイニシアチブをとった行き掛かり上、このタイミングで何らかのイニシアチブをとらざるを得ないとの判断で、手さぐりの状態のまま EAVG II を設立してしまったのではないか。東アジア統合に対する熱意という点で、李明博大統領には金大中大統領ほどの情熱はなかったということかもしれない。また、EAVG I と比べて、EAVG II に手さぐり感が強いのは、背景として「centrality」を求める ASEAN や拡張主義を高める中国の存在があり、EAVG I の時とは地域全体の雰囲気や状況が異なっていることも影響しているのではないか。
- (ロ) 環境問題、特に水資源管理は、今後東アジア地域において重要な問題になると思われるが、EAVG II ではあまり大きく取り上げられていなかったようで、残念である。
- (ハ) RCEP を梃子にして「単一市場」を形成するというが、東アジアでは「単一市場」を創設するための前段階の整備がまるでできていないことを指摘したい。

以上
文責在事務局